

## 「恋歌」に見るジェンダー

大阪芸術大学 文芸学科 教授 龍本 那津子

本稿は『万葉集』および『古今和歌集』における「恋」を含む歌語（「恋」「恋ふ」「恋す」など）の分析を通して、特に〈恋の主体〉の在り方を考察することを目的とする。

「恋」は動詞「恋ふ」の連用形で、上代においては「人、土地、植物、季節などを思い慕うこと。めでいくしむこと。」（『精選版日本国語大辞典』）としてその対象に幅があったが、中古以降はもっぱら恋愛の感情を表すようになった。王朝和歌においても

恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ  
思ひそめしか（壬生忠見 拾遺集 恋一）

のように「恋す（サ変動詞）」が多く使われる。

『万葉集』においても、

我が後に生まれむ人は我がごとく恋する道にあひ  
こすなゆめ（11 二三七五）

恋するに死するものにあらませば我が身は千度死  
に反らまし（11 二三九〇）

などのように、男女間の恋愛感情を表す「恋す」の用例も見られるが、まだ数は少なく動詞の「恋ふ」を使うことが一般的であった。この「恋ふ」については『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂 1967）によると以下の通りである。

こふ[恋]（動上二） 思い慕う。眼前にないものに心惹かれることをいう。特に異性を思う場合に用いられることが多く、通常、格助詞二に導かれる文節を受ける。相似た意味を表わすことのある思フが、フを受けるのと対照的である。形容詞コホシ・コヒシはこの語からの派生。（以下略）

『万葉集』では「君に恋ひうらぶれ居れば悔しくも我が下紐の結ふ手徒らに」（11 二四〇九・柿本人麻呂歌集）のように、人を対象にする場合には助詞「に」を受けるのが普通であり、また、「この山の黄葉の下の花を我はつはつに見てなほ恋ひにけり」（7 一三〇六・人麻呂歌集）のように、「を」を受ける場合は人間以外のものを対象とするのが普通であったと考えられている（『万葉ことば辞典』大和書房 2001）。

また、表記としては訓字を用いた「戀（恋）」の他に、音仮名による「古非」「古飛」「孤悲」「故非」などがある。

今回の調査においては、まず『万葉集』全体から「恋」（「恋」「恋ふ」「恋し」「恋〇〇」）を読み込んだ歌を抽出し、個々の歌について作者の性別を特定する作業を行った。題詞や左注によって明らかなものもあるが、明記されないものも多い。そこで以下のような条件で男女を判別していた。

- ①「君」「妹」「背」「我が背子」などの男女間の呼称
- ②「我行く」「通ふ」など「妻問い」の行動様式に関わる語句
- ③贈答などの文脈

その結果、『万葉集』全 4516 首中、「恋」に関わる語句を読み込んだものは 763 首、男女別に見ると、男 361 首、女 189 首、判別できないもの 213 首、となった。ここからさ

らに「恋愛」に関係するもののみを抽出すると、男 267 首、女 180 首、判別できないもの 197 首、という結果が得られた。

この結果から『万葉集』においては、男:女=約 3:2 で男の方が多いながらも、女が自らの「恋」を歌っていたことがわかる。

一方、『古今和歌集』の「恋」については、近藤みゆき氏の先行研究がある。

氏の研究はおもに王朝和歌を対象として、古今和歌集のフルテキストデータを統計処理して、文字列分析をもとに「男性特有表現」「女性特有表現」を分析し、多くの成果を生み出している。その中で、「恋」の付く語を含む女性歌は極端に少なく、「恋」に関する語は「男性特有表現」のひとつであり、平安和歌の女性は「ことば」上で恋の主体に立たない、ないしは立ち得ないものであった、と結論づけている（『王朝和歌研究の方法』笠間書院 2015）。王朝和歌の「ことば」とは、性差を意味として不可分に持ち、またそれは男性性・女性性の役割の別を集約していくものでもあったということ、そしてその方向性をほぼ決定した点でも、古今集は一つの転換点となっている、という近藤氏の説は十分にうなずけるものであるが、氏の研究にはさらに検討を加えねばならない点がある。ひとつは勅撰集をはじめとした王朝和歌とは異なる『万葉集』に特有の作歌事情が十分に考慮されていないこと、もう一つは歌を男/女に分けていく際に、「詠み人知らず」を捨棄してしまっている点である。

『古今和歌集』において作者を記さない「詠み人知らず」は、全体の約 4 割を占めており、単純に見過ごすことができないボリュームがある。実際、恋の部（巻 11～15）の「詠み人知らず」歌の中には、『万葉集』の女性作者の歌と歌語や発想がよく似ているものもある。「転換点」としての『古今和歌集』を考える上で、ひとつのミッシング・リンクとも言えるのがこの「詠み人知らず」の歌であり、『万葉集』の歌のことばとの重なりを精査することが、必要である。

もう一つ、『古今和歌集』において男性/女性の役割化が見られるのは、歌の配列の問題である。春夏秋冬を詠む各巻において、それぞれの歌が季節の進行に伴って整然と配列されており、一つのコスモスを形成していることはよく知られている。恋部（第十一～第十五）についてもまた、恋愛のプロセスに従って時系列的に配列されていることはすで先学によって指摘されている。大まかにいえば「恋一」「恋二」は萌芽期、「恋三」「恋四」は成就期、「恋五」は終末期である。後藤祥子氏（『世界へひらく和歌』勉誠出版 2012）は各巻における作者の男女比に注目し、恋一、恋二では女性の歌はほとんどなく、恋三になって女性の歌の比率が増え、恋四、恋五と後半に向かうにつれその比率が大きくなる事を述べ、恋の始発は男からであり女はその求愛表現をはぐらかし、いなす、という定型があることを指摘する。これもまた、王朝和歌の「恋」の主体が男であったことを示す例であろう。